

〔研究論文〕

帝国の形成と帝国意識 — 『米澤日記』を事例として—

坪田 典子

〔Article〕

The Imperial Mentality in the Formation of the Imperial Japan: A Case Study of YONEZAWA Hiroyasu

Michiko S. TSUBOTA

Abstract

This article is regarding the imperial mentality of YONEZAWA Hiroyasu, who lived during the late Meiji era for Showa era, born in a traditional city of Kanazawa where he lived throughout his life. YONEZAWA Hiroyasu was a marquetry craftsman. He had been writing a diary since he had started at the age of 19 (1906) until 85 (1972). His diary shows how the Japanese Imperial identity was formed through his life.

Using the data from his diary as a main text, I have analyzed his imperial mentality that was internalized through the late Meiji era to Taisho era. I have discussed his imperial mentality from three different points of view: firstly, how he collected information and identified through that material to form his imperial mentality. secondly, the process of his identification under Japanese Imperialism. thirdly, how he practiced his imperial mentality, supporting Japanese Imperialism.

1. 問題関心

帝国としての日本近代をめぐっては様々な議論が交わされてきており、近年の議論の流れの一つに、帝国の基盤となる空間的条件が失われた後にも存在し続けている、帝国・植民地の支配-従属関係に基づく差別と支配の意識に焦点を当てた議論がある¹⁾。そこでは、帝国に属する側の国民が内面化している「帝国意識」がとり上げられる。帝国・植民地の時代の広範な制度や言説、言語、表象やイデオロギー等と、「意識の植民地化」が問題とされ、帝国意識そのものが分析される²⁾。

しかし、帝国を有する側の国民が内面化していた「意識」あるいは「思考枠組み」に関しては、そこでは、所与のものとして扱われており、日本が西欧列強の帝国主義の仲間入りをし、植民地を擁する帝国となったことが、当の国民の側にどのような意識と認識の変化をもたらしたのか、ある

いは、帝国の側の国民がそれをどのようにして主体的に自己のものとしていったのか、という意識化のプロセスに踏み込んで「帝国意識」を分析することはなされてこなかった。

他方、民衆史の分野では、民衆の意識のプロセスを分析した研究は少なくない³⁾。だが、日本が世界史の中で帝国としての地位を確立した後の、本格的な帝国・植民地の時代の国民の意識に関しては、指導＝啓蒙する側にある民衆の分析、あるいは、指導＝啓蒙する側からみた分析が散見することとどまる⁴⁾。帝国の存続、帝国・植民地主義の存在においては、指導＝啓蒙する側の存在の重要性とともに、広範な層が下から帝国植民地主義を支えるという側面もまた欠かせない。広範な国民レベルでの強力な下支えがあって初めて帝国が維持されるのであり、意識化のプロセスの怖ろしさもそこにこそ存すると考えられる。

そのような国民レベルでの下支えの一例として、本稿では、明治、大正、昭和を生きた一人の日記の分析を通して、『米澤日記』の作者米澤弘安（以下、弘安）の政治意識（「帝国意識」）を分析していく。明治後半期以降、制度的にも、実質的にも、日本が帝国として成立し、植民地を支配するという全く新しい経験が、国民の意識にどのような変化を生じさせ、最終的に、帝国・植民地主義を下支えするような意識となっていくのかを、米澤弘安に即してみたい。

2. 方法

本稿では、明治・大正・昭和の時代に渡って書き続けられた一人の伝統工芸職人、加賀象嵌職人であった米澤弘安の日記、『米澤日記』を主な資料とする。日記は、日露戦争後の1906（明治39）年、弘安19歳のときから死去する85歳の1972（昭和47）年までのものが残っているが、日記が最も充実しているのは1909（明治43）年、弘安22歳から1925（大正14）年、弘安38歳の時期である⁵⁾。その充実している時期の日記が中心となる。

植民地を支配するという全く新しい経験が、国民の意識にどのような変化を生じさせ、いかにして、積極的、主体的に、帝国・植民地主義を下支えするような意識となっていくのかを植民地朝鮮に焦点を当てて、植民地朝鮮という帝国の他者に対する弘安の意識と認識とをとり上げる。このような弘安の他者認識を、日本が帝国として確立していく明治後半期と、帝国を拡大していく大正期とに時期区分して帝国意識をみていく。

分析に際しては、次の三つの視点から行う。一つは、植民地朝鮮や帝国に関わる情報をどこから導入したのかという点である。二つ目は、そのような情報に支えられて、どのように主体的な認識へと展開していったのかという問題である。三つ目は、主体的なプロセスの結果どうなったのかという帝国を下支えする問題である。

3. 米澤弘安と『米澤日記』

『米澤日記』の作者、米澤弘安は、近代日本が、天皇制国家としての法的体制を整えて船出をしたのと時を同じくして生を受け、学校教育制度を整えていくまさにそのようなときに初等教育を受ける。そして、幼少時代から国家の対外戦争を目の当たりにし、軍都となった金沢で、軍隊と日常的に接触しながら⁶⁾、また、級友や親戚が徴兵されたり仕事を得たりして植民地朝鮮に渡るのを身近な経験としながら、帝国の外部に対する他者認識（帝国意識）をつくり上げていく⁷⁾。

この点をもう少し詳細にみてみよう。米澤弘安は、1887（明治20）年、旧百万石加賀藩の地、金沢に、

代々金沢旧藩前田家の御用職人であった米澤家6代目の父清左衛門⁸⁾と母きくとの間の8人の子どものうち6番目の二男、3人の男兄弟の二番目として生れる。父の職名「弘正」の一字をとって弘安と名づけられた。二男であったが、10歳年上の長男である兄が仕事の関係で名古屋に居をこまえていたため、米澤家という家と家業を継ぎ、両親を扶養する。

弘安が生れた2年後の1889(明治22)年には大日本帝国憲法、その翌1890(明治23)年には教育勅語が公布される。そして、日本が行った最初の対外戦争、日清戦争の年、1894(明治27)年に金沢市立西町尋常小学校へ入学する。翌1895(明治28)年2月、清の北洋艦隊を全滅させた威海衛陥落の報には日本中が沸きかえり、弘安のいた金沢市内の小学校でも一斉に祝賀式が行われている⁹⁾。

尋常小学校の義務教育を終えた後、高等小学校へ進学し、1902(明治35)年に首席で卒業する。成績優秀でありながら、「家庭の事情で進学できなかった弘安は」、1904(明治37)年、「帝国中学会に入会」して、「今日の通信教育にあたる中学講義録による」勉学を続ける¹⁰⁾。その間、12歳からは父のもとで象嵌の手ほどきを受けている。父から技術を学んだ弘安は、象嵌職人としての誇りを持ち、優秀な技術を持つ伝統工芸職人/作家として、注文の仕事をごなして生計を立てる一方、各種展覧会に出品して優秀な賞を取めるなど作家としての活動も同時に行う。

現存する日記は1906(明治39)年1月、日露戦争後の出征兵士の帰還の記述から始まる。弘安19歳のときからである¹¹⁾。帝国の膨張に伴って、日清戦争後、金沢には駐留師団も増え、軍都としての性格が強化されていく。日清戦争では金沢駐留の第7連隊から、日露戦争では、第7連隊に加えて、日清戦争後新設された第35連隊および第9師団から出兵し、主要な戦場においてその主力として戦ったため、金沢市民を含む石川県出身者は日露戦争では甚だしい被害を被っている¹²⁾。

その後も、第一次世界大戦、「満州事変」、日中戦争、第二次世界大戦と、まさに戦争に次ぐ戦争の時代、帝国の伸長の時代と、敗戦後の時代を生きた。そして、「最後の加賀象嵌職人」として、1972(昭和47)年10月、85歳で死去する。同年7月3日までの日記が残っている。

4. 帝国意識 - 日本の対外侵出に伴う他者認識 -

ここでは、日本近代の対外侵出に伴って生じる、その対象となる他者をとり上げて弘安の他者認識(帝国意識)を検討する。日本の近代は対外戦争をくり返し、帝国主義列強の仲間入りをし、帝国を築いていく歴史としても捉えられるが、それは、植民地を擁する帝国として、近隣の国や地域を侵略し支配していく過程でもあった。帝国を拡大しつつあった明治後半から、大正の時代に、そのような国家に属する国民であった弘安は、帝国の民の一人として、日常的に生起する帝国の経験に対し、どのような受容主体であったのだろうか。

ここでは、日本が「帝国」を確立していく明治後半期と、「帝国」を拡大していく大正期との二つの時期に区分し、それぞれの時期における弘安の他者認識・意識を、植民地朝鮮を中心に分析する。その際、次の三つの視点を考慮して行う。その第一は、植民地朝鮮に対する他者認識が、流布される媒体である新聞や当時盛んであった各種の演説会、また植民地朝鮮と直接に接した人々から直にもたらされる経験といった様々な情報網を通じて、弘安の中で形成されていっているという点である。つまり、植民地朝鮮に関する知識をどこから導入したかというチャンネルの問題である。

第二は、その植民地朝鮮への認識が、最初は漠として、かつ単なる与えられた認識であったものが、植民地支配が本格化する中、帝国日本を脅かした朝鮮の独立運動を経て、弘安の主体的な認識

へと変化していつているという点である。それにはとりわけ、植民地朝鮮の警察機構の末端で朝鮮人を直接に取り締まる仕事に従事していた叔父の藤掛嘉作¹³⁾や宗主国の人間という特権的な地位にあった渡鮮した友人たちの経験が、弘安に直にもたらされたということが大きく作用している。つまり、弘安の主体的な認識へと展開していくプロセスに関わる問題である。

第三は、そのようにして獲得された弘安の主体的な他者認識が、関東大震災における朝鮮人への認識に見られるように差別と排除を周辺で支えていつているという点である。つまり、第一のチャネルを媒介に、第二の主体化のプロセスを通してもたらされる結果に関わる問題である。

4-1. 明治後半期 - 帝国の確立と朝鮮の植民地化 -

植民地朝鮮に関わる日記の記述を具体的にみていくが、まず、朝鮮植民地化の重要な事項である統監府設置と韓国併合についてみてみよう。以下、日記からの引用は（西暦、元号、Mは明治、Tは大正、月日）の順で、年月日を表記する。また、引用は、日記の表記のまま行っており、現在では使用されていない仮名遣いや、漢字使用、当て字もそのまま引用している。そのため読みにくい点があることをお許しいただきたい。また本稿では、韓国併合が成立した明治43年8月29日、「韓国の国号はこれを改め、爾今朝鮮と称す」（勅令）により、植民地朝鮮に関連する表現に関して、韓国併合以外は、朝鮮、植民地朝鮮、朝鮮人という語を使用する。

朝鮮に関する初めての記述は、「韓國に統監府を開廳したるは、實に明治三十九年の今日なりき」（1908M41.2.1）と、実際の設置から2年後に記述されている¹⁴⁾。また、韓国の植民地化は1910（明治43）年の韓国併合で成立するが、この併合の事実も、併合がなされた時点ではなく、後日、日記に記される。統監府開庁にしても韓国併合にしても、その事実が成立した時点で即、日記に記されるのではなく、後日、その事実が書かれている。

弘安の日記記述の特色の一つに、毎日読む新聞の記事を記すということがあげられる。弘安の周りで新聞が回覧して読まれていた時代に、二種類の新聞¹⁵⁾を購読することを日課としていた弘安にとって、新聞は「文明」を象徴する学ぶ媒体でもあった。新聞を読むことは、時勢を判断したり、自らの意見を構成したり確認したりすることでもあった。それゆえ新聞の記事と日記とは密接につながっており、興味関心のある記事や重要だと弘安が判断した記事は、日記に記述された。記事はそのままの形で日記に書き写されるか、あるいは、生起した事件・出来事として日記に記された。つまり、新聞を読み、そこから気になる記事や重要だと思われる記事を選択してとり上げ、日記に記述するという弘安の一連の行為は、記事の示す重要性を自らの内にとり込み、その重要性を自ら確認していくという行為でもあった。

その点を考慮すると、統監府設置（1906M39.3）や韓国併合（1910M43.8）といった事実が一定の時間的経過の後に日記に書かれるということは、統監府設置や韓国併合といった事実が成立した時点では、その事実自体が十分に認識されていなかったか、あるいは明確に捉えられることなく、かつ、その重要性も認識されていなかったということを示している。言い換えれば、書かれた時点で初めて、その事実を問題としてとり上げるに至り、その事実の持つ重要性を認識していく端緒が開かれたということの意味する。

韓国併合（1910M43.8）に関する記述は、同年、大晦日（1910M43.12.31）の日記の後に、「43年史」として、別枠で記されている。「43年史」には、その年に起こった事件・出来事が記述されているが、その中の一つとして、「・八月廿九日韓国併合ナル」（1910M43.12.31）と記されている。続く新年の日記の初めに、「日韓合邦後第一回新年ヲ向フ」（1911M44.1.1）と記され、その後1月1日の

日記が続く。そして、同年2月11日の紀元節には、「・今日ハ紀元ノ佳節ニシテ、皇祖國礎ヲ樞原ニ定メ給ヒテヨリ百二十一代二千五百七十餘年皇統連綿トシテ天壤ニ窮マリナク、加フルニ朝鮮ハ領土トナル。大ニ祝スベキナリ」(1911M44.2.11)と記される。

これは、韓国併合の時点では明確ではなかった韓国併合という事実が、時間的経過の後に、朝鮮が新しい日本国の領土として、捉えられるようになったことを示している。そして、日記に記された時点において、朝鮮という新しい領土拡大を、「大ニ祝スベキ」喜ばしいこととして捉えていこうとする姿勢が、あらわれてきたということを示している。以上は、植民地朝鮮との具体的な接触が始るより前の状況である。

では、1910(明治43)年の韓国併合という歴史的事実によって、弘安の日常が具体的にどのように変化したのかという点をみていくと、併合を契機に、弘安の日常の風景の中に、朝鮮に関して新しい変化が生じているのがわかる。弘安のまわりでも現実には「朝鮮へ行く」人々が一挙に増加している。母の弟であり、親密なつきあいのある叔父藤掛嘉作や同年代の親戚、友人たちが、新たに職を得たり徴兵されたりして朝鮮へ渡っている¹⁶⁾。弘安にとって居住地金沢以外とのかかわりは、東京¹⁷⁾、姉兄が居住する横須賀や名古屋などが主なものであったが、何人もの身近な人たちが、ほぼ同時期に、朝鮮という同一場所へ移住するという出来事は初めてのことであった。それは、それまでの居住地金沢を後にして植民地朝鮮へ渡った人々にとっても、そのような人たちを身近に持つことになった弘安のような人々にとっても、生れて初めての全く新しい経験であった。

双方にとっての初めての経験がそれぞれの日常に組み込まれることで、植民地朝鮮での生活や当地での様子が、手紙や帰国した際の語りなど、様々な形で弘安に伝えられたであろう。その経験は、東京や横須賀や名古屋といった日本国内への移住経験とは全く異なる種類の経験として、すなわち、他民族を支配下におくというそれまでの歴史で経験したことのない植民地領有という支配する民族としての経験としてあった。

しかし、弘安の日記には、渡鮮した彼/彼女らの朝鮮での生活や当地での様子が、手紙や彼らが金沢に帰ってきたときに「朝鮮の話をした」という形で記述されることはあっても、その「話」の内容が具体的に記されることは、一度を除いて、なかった¹⁸⁾。

韓国併合によって弘安のまわりでも朝鮮へ移住する人が増え、その人たちを通じて、直接に植民地朝鮮の情報がもたらされるようになったということに加えて、ここでは次の二点を確認しておきたい。一つは、情報媒体によってニュースが何度か繰り返された後にはじめて、統監府設置や韓国併合という歴史的事実が認識されはじめていたという点である。二つ目は、韓国併合が「大ニ祝スベキ」という記事を受けて、それが「祝スベキ」事柄であると、自ら納得させる方向で自分自身を促しているということを見てきた。

4-2. 大正期 - 帝国の拡大 -

日本が帝国としてその版図を拡大していく第一次世界大戦参戦をとり上げ、当時最も戦果が鼓吹された青島占領およびその祝賀と、弘安のその受け止め方についてみていく。第一次世界大戦参戦関連の日記の記述は、参戦と戦闘の経過のニュースが、ヨーロッパの戦況や国内の他のニュース、また、仕事や日常の生活が記述される中に組み込まれる形で、逐一日記に記される。そのため、その記述を追うだけで、戦争の経過や戦果の事実が手に取るように分かる。しかし、日記に記すことで、克明に戦況や戦果を追いながら、その勝利には、戦果としての事実以上の関心は抱かれていないようである。例えば、青島陥落の最終段階における、青島関連の記述は次のようになっている。

1914T3.10.31	◎青島總攻撃 三十一日拂曉より總攻撃を始め、我軍士氣旺盛なり
1914T3.11.1	◎青島灰泉角砲臺は陥落せり
1914T3.11.4	・本日、イルチス砲臺陥落の号外出で、青嶋の陥落も近づきし爲、夜、向の空地ニ數十人集り、提灯行列軍歌の練習をして居た
1914T3.11.7	青嶋陥落の号外が勇ましく馳せ廻る ◎青嶋陥落す

戦況が逐一記される一方、青島陥落に備えて勝利の提灯行列の練習をするグループ（上記 11.4 の記述）について記される。日記には、青島陥落の事実や提灯行列の練習をする様子は記されるが、それ以上に特別の関心は払われてはいないようである。そのことは、青島陥落の翌 11 月 8 日の日記からも窺える。8 日は、鳥謡會とあって、弘安が、長年、謡を学んでいる会の秋季謡會が近隣の温泉で催されることになっており、8 日の日記は、この秋季謡會の記述のみで占められ、青島陥落のこともその後の祝賀のことも一切書かれていない。11 月 8 日の新聞には、翌 9 日に催される祝賀行事が市民へのアナウンスとして記事にされているにも関わらずである。

青島陥落を祝して、陥落二日後の 11 月 9 日には「鳴舉行」と官民合同の「大祝賀行列」が催される。その後、民間の諸団体による祝賀行列が何日も続いていくのであるが、この祝賀に関する弘安の態度を見ていく。石川県庁、金沢市役所、商工会議所により「青島陥落祝賀の大提灯行列九日、全市鳴舉行」¹⁹⁾ が決まり、弘安宅でも 11 月 9 日には、「鳴を催との事、鳴物を用意して十二時を待ち、「宅でも皆で石油鐘をたゞき萬歳を唱」えたと記される。11 月 9 日の祝賀行事は、「全市鳴（十分間）を舉行する筈にて各工業諸會社の瀛笛、各社殿の太鼓、各寺院の半鐘、各區の半鐘は申すに及ばず苟も音聲を發し得るものは金盃たると鍼力鑿たるとを問はず何にても可なれば各戸一齊に萬歳の聲を放ちて之を打鳴らすべく」²⁰⁾ と、青島陥落後二日にわたって事前にアナウンスされていた。

11 月 9 日のもう一つの歓迎行事である全市あげての大提灯行列の方は、「一萬に餘る大行列」²¹⁾ であり、弘安は、「夕食後、父を留守ニ四人にて官民合同の大提灯行列を見ニ行く」が、「見ても盡きないので群衆を掻き分けて、福助座ニ来る」と劇場で演芸を觀賞している²²⁾。翌日からも引き続き、提灯行列が催され、翌 11 月 10 日も「・陥落祝いの提灯行列は今夜も出た」と、弘安は行列を見に行く。11 日も「・夜も太鼓の音など聞え賑しそであったから、夜業を止めて見ニ行く」と、出かけている。12 日も、「・今夜はもう提灯出まいと思ったに、…出るとの事で」と、また、見に出かけている。結局、弘安は、9 日から連日 4 日間、提灯行列を見に出かけている。

・陥落祝の提灯行列は今夜も出た。父は古田様へ行つて片町方面の行列を見たと。僕も堤町迄行き、中嶋町、五寶町、四高校、傳馬町、泉町、川上等の行列を見た。百鬼夜行の出立なり。大砲、軍艦の造物多かりしか、中嶋町の軍艦はセメントの空樽を煙筒として煙を吐かせしは上出来なりき²³⁾。

変装は益々面白くなった。兎の餅搗などもあった。軍艦模造も汽笛を鳴し、サーチライトもつけるやうになった。帰りて夜業せしか太鼓の音ニたゞやかされて、又見ニ出た²⁴⁾。

そして、11 月 13 日には、急遽、「合同にて催す事、大行燈、大砲等を造る事ニ決す」と、提灯行列を自分たちで催す側になっていく。前夜、近隣の町内から提灯行列の共催の相談を受けたときは「出るか出ないかと相談なるか、提灯行列に立遅れの處へ甚だ急なる事とてやると云ひ切れない」

と仲間内で迷っていたのを翌朝は「遂ニ話整立し」、夜の行列に向け、提灯を注文したり²⁵⁾、仮装の準備に奔走したりする。一転して、見る側から「町内の提灯行列を催せるニ世話方とな」った弘安は、忙しさのため日記をつけることができなくなり、「二三日間日記ハ後より思ひ出して記しぬ」(1914T3.11.12) ことになる。当日を回想した日記には、行列の時に「七聯隊ニテ万歳を唱へ」や「大砲等を造」と、青島陥落と直接関連した記述も見られるが、多くは出し物や自分たちの仮装に関した記述に終始している。

昼食後、平楼方の納屋ニ至り、辰巳才一君、上野太一君、藤田重次郎君、能口多作君、清二、僕等、外数名にて大砲模型製作掛る。長二間餘、太サ先一尺五寸、元四尺の大なもの木材ニテ組立て、上にナマコ板を張る。大混雑して漸く四時前ニ出来上った。それより提灯各戸ニ配る。各々は変装の準備ニ掛かる。僕は、急敷くて中々やって居れないから母ニ頼んで洋服の胸、肩、背ニ菊花を着けて貰ふ。父にはシルクハットを作って貰ふ²⁶⁾。

各変装者は一寸知れない。よく見れば知って大笑する。大工連の藤田君、京谷、辰巳才一、能口多作の四名は、大噴発して頭ニオカサをつけて、赤ん坊となってピッピ、ガラ／＼を持つ。天地君も子守をやる。松川、千田、清二、藤原、松本(□□□)、野積(魚屋)は女装した。花木八百屋及北川、宮嶋は侍となった。其他思ひ／＼の変装は妙を極めた²⁷⁾。

青島陥落後、祝賀の提灯行列を連日見に行く側から、自分たちで催す側に変ってきているが、これらの記述から見えるのは、青島陥落という勝利を祝うというよりも、行列の出し物や仮装を楽しむことに主眼がおかれ、行列自体が自己目的と化しているという点である。弘安たちには、出し物や仮装を楽しむ以上には、青島陥落が重要視されてはいないようである。そうであるならば、青島戦や陥落、陥落後の祝賀の記述は、帝国の拡大といった陥落の事実の明瞭な認識の結果としてよりも、韓国併合時の記述の場合と同様、青島陥落が、「祝うべき」事柄であると、自ら納得させる方向で自分自身に促しているように見受けられる²⁸⁾。

4-3. 帝国の他者 - 弘安の直接経験 -

最後に、植民地朝鮮に関わる二つの事件 - 三・一独立運動と関東大震災 - の記述を見てみよう。まず、1919(大正8)年3月1日の三・一独立運動に関してである。韓国併合から9年目にあたる。独立運動²⁹⁾に関しては「◎朝鮮京城ニ暴徒起る」(1919T8.3.6)と、日記に記される。独立運動に直接関わる記述は、このほかには1件だけ、韓国併合後に朝鮮に渡った叔父藤掛嘉作からきた次のような手紙の内容を記した記述がある。「朝鮮今回の暴動にて入獄せしもの八千ニ及び公州監獄でさえ四百名も入り大多忙なりと」(1919T8.5.24)。

叔父の藤掛嘉作は当時朝鮮忠清南道の公州で警官をしていたので、植民地支配の統治機構の末端で独立運動の弾圧に直接関わっていたことになる。この1件の記述以外には、植民地朝鮮への渡鮮という当時の人びとの全く新しい経験であるにもかかわらず、渡鮮者の側からの情報として、弘安の日記に記されることは一度もなかった。韓国併合後9年を経てはじめて中身のある情報が記されたということは、弘安にとって、その内容が意味のある情報であったからであろう。その意味内容は、「朝鮮京城ニ暴徒起り、その「暴動にて入獄」された「暴徒」が「八千に及び」中心から離れた叔父のいる「公州監獄でさえ四百名も」投獄されたという、当時、一般では知りえない情報、すな

わち、統治機構に属する者のみが知りえた情報が暴露されている。そのため、叔父は「大多忙なり」という。

三・一独立運動は、日本側の統計によっても、「検挙者の出なかったのは12府332郡2島のうち5郡1島だけ」とされ、日本の植民地支配に対して独立を求める全朝鮮的な運動が展開された。「平和的な集会やデモに警察や軍隊が弾圧を加えて何人かを捕らえる、これを奪い返そうと群集が警察や役所に押しかける、これに発砲して死傷者を出す、という経過が繰り返される中に、弾圧が激化した」とされるが、現在では素手の人びとに対する夥しい数の虐殺が明らかになっている³⁰⁾。

独立運動の日記記述は、3月6日に1回と、3ヶ月近く後の5月24日、叔父からの手紙の内容が記された2回だけである。独立運動に関して記述された回数とその内容からすると、当時、朝鮮には叔父家族や友人をはじめ身近な人びとが生活していたが、彼／彼女らの生存に関わるような事件としては捉えられていない。他方、独立運動は、「暴動」であり、「暴徒」ゆえ「入獄」の対象として捉えることに疑問は抱かれぬ。

次に、関東大震災の場合はどうであろうか。関東大震災は1923(大正12)年9月1日に起こる。韓国併合から13年目にあたる。当時、横須賀には姉家族が、東京には義弟や遠縁の親戚等が住んでおり、彼女／彼らの安否が最大の心配事である。日記には、親戚や知人の安否を気遣う様子や震災の惨事が記述される中に、朝鮮人の記述がなされる。

聞けば益々惨状甚しく、今日の三時頃、向の泉屋様へ四高生二名、東京を逃て帰って来られ其話を聞く。横濱のグランドニ数万のヒ難民あり、猛火の為、千名計助かったが残りハザン死せりと。其学生ハ隅田川へ飛込み、折よくボートを見付て乗り、手でカイをつかひ、向島付近へ来ると(其間八時間かかったと)不逞鮮人が出て、陸の方ニ軍隊や青年團、在郷軍人團等と衝突したと。学生君の舟へもやて来たが、二人程殺して漸く上陸し、川口驛迄逃れて汽車ニ乗ったと。躰中、傷かついて居た³¹⁾。

関東大震災時に、弘安は、はじめて植民地朝鮮の具体的な他者と直接に対面する経験をする。関東大震災直後に、朝鮮人が井戸に毒をいれたとか、朝鮮人が暴動を起こすとかのデマが流され、多数の朝鮮人が虐殺されたが³²⁾、そのようなデマが真実味を帯びて震災の惨事とともに流布され、金沢に住む弘安にもすでに共有された情報として受け取られていた様子が窺える。逃げてきた「不逞鮮人」を四校生たちが「二人程殺し」たことを、四校生が「躰中、傷」を受けながら生還できたことと対照して語られる。そこでは、四校生たちが「二人程殺し」たことは問題にもならず、四校生が生還できたことのみが重要視される。

・夜、鳥島先生追悼會の案内状を辰巳君、宮嶋君、小森君方へ持って行き、散髪をして停車場へ行くと、東京より避難民か来るのを見二出る人か、停車場前ニ充滿して居る。又東都へ出発の軍隊か溜って居る。其中ニ鮮人を引捕へたと、交番前ハ山のやうな人だ。殺してしまへと騒ぐ。多くのマッチを持って居て、貨車ニ隠れて来たとか噂して居た。汽車か着く。金沢ニ下りた避難民ハ六、七名計であった。皆着のみ着の儘、あはれな姿である。汽車内の避難民には青年團がサイド、そば湯等を供与して居た。土方のお母様も橋本知治様か来られないかと出て居られた。帰る時、鮮人を玉川警察へ牽引せるを民衆が押掛け、黒山の様ニ前ニ居た³³⁾。

弘安は「鮮人を」「殺してしまへと騒ぐ」人々の渦の中にはいないが、「鮮人」を取り囲む「黒山の様」な人々の背後にいて、そのような人びとと共有された意識で「鮮人」をまなざしていることが窺える。1910（明治43）年の日韓併合後、植民地朝鮮をめぐる弘安の周囲での全く新しい変化、とりわけ身近な人びとが移住するという新しい世界の拡大を伴う変化にもかかわらず、朝鮮人に関する具体的な記述は一度も日記に登場しなかったが、独立運動時や関東大震災時には、「暴徒」や「鮮人」、「不逞鮮人」として記される。

「鮮人」、「不逞鮮人」という表現は、当時、朝鮮人に対して用いられた賤称語であり³⁴⁾、関東大震災時に急に出現した言葉ではない。それまで弘安によって、少なくとも日記上では使用されることのなかった言葉が、震災時に躊躇なく使用できたのには理由があるだろう。情報が途絶え、近親者の安否が心配され、多くの日本人が犠牲となった震災の大惨事という危機的状況の中で、朝鮮人が暴動を起こしたり、井戸に毒を入れたり、マッチで火をつけて放火したりといったことが、蓋然性と妥当性をもった脅威として、弘安に捉えられたからに他ならない。

「鮮人」や「不逞鮮人」という表現にしても、日韓併合後、23年という四半世紀に近い年月にわたる、帝国・植民地主義の支配と被支配の構造下で、当然のこととして形成されてきた、その関係性の表現形態に過ぎない。「鮮人」・「不逞鮮人」が宗主国の日本人に「危害」を加えるのなら、「殺してしま」ってもかまわないと、当時、人びとが考えていたこと、そして、弘安も例外ではなかった様子が窺える。

弘安の他者認識・意識（帝国意識）を、時期区分と事件に分けて、植民地朝鮮を中心にみてきたが、三つの分析視角について概括しておきたい。

まず、チャンネルの観点からは、新聞という公の媒体とそれに対する弘安の向き合い方、新聞記事の取り込み方をみてきた³⁵⁾。本稿では新聞しかとり上げなかったが、新聞を代表とした公に流布する媒体と、植民地朝鮮の経験に直接裏づけされた身近な人びとという個人的私的な媒体、それぞれの媒体が、相互に影響しあい、補完しあって弘安の他者認識（帝国意識）にかかわっており、「暴徒」、「鮮人」・「不逞鮮人」とするような「帝国」の側の意識形成へとつながっていている。

つぎに、主体化のプロセスという観点からは、「鮮人」や「暴徒」に象徴されるような意識に裏づけされた他者認識（帝国意識）を持つに至るようになるまでには一定の時間的経過がみられることである。様々な形でくり返しインプットされてきた情報が身近な人々の具体的な経験によって裏づけされることで、そしてさらに、自らの経験を加えることで、単なる上からの言説の受け売りの認識であったり、自ら自覚を促していくといった啓蒙的、過渡的な認識であったものが、その言説を支える主体的な認識へと変化していている。

最後に、主体的な認識として形成されていった結果、とりわけ、帝国の側を脅かす何らかの危機的状況が出現した際には、自分たちを脅かすと危惧される帝国の他者に対して、暴力的に「殺」すことをも厭わないほどの感情を引き起こさせるような、主体的認識へと容易に転換されていく状況を見ることができる。そして、そのような認識とそれを支える意識が、帝国を守り下支えする意識に通底している。そのとき、単なる受容主体に過ぎなかった弘安は、実質的な機能主体として、帝国の他者に立ち向かい、帝国を維持し支える役割を果たしていくようになる。

5. 結語

本稿では、他者意識＝帝国意識の主体化のプロセスを『米澤日記』を事例にみてきた。従来の帝

国意識の研究では、例えば、帝国意識が、民族・人種差別として現象されるその内実を分析することには関心が向けられてきた³⁶⁾。しかし、帝国を構成する国民が、そのような帝国意識をどのように内面化し主体化していくのかというそのプロセスは関心外におかれてきた。

帝国意識の研究が、過去の遺物としてではなく、現在と未来のわれわれの意識と認識に直接かわる問題であるならば、初発の段階での主体化のプロセスの問題は避けて通ることができない。植民地を有する帝国の側の国民が、上からの指導や啓蒙だけでなく、主体的に内面化していく、そのような主体化のメカニズムが帝国の側にも国民の側にもあったがゆえに、一人一人が帝国を支えする力となって作用していた。そこにこそ、帝国意識の見えざる真の怖さがあるのではないだろうか。

また、民衆史の分野では、例えば、色川大吉の天皇制イデオロギーの研究では、民衆への浸透過程を民衆の立場から主体化のプロセスにまで踏み込んだ分析がなされている。しかしながら、色川の場合とは次の二点でずれがある。一つは、色川の場合は、基本的には抵抗する民衆のそれであり、本稿で扱ったような抵抗に向わない広範な層が内面化する政治意識の恐ろしさとは異なっている³⁷⁾。もう一点は、色川の中心的関心は、時代的に明治の前半期、すなわち、帝国としての枠が成立する以前の時期が主であるので、帝国とその国民が成立して以降の「帝国意識」に関連した議論はなされていない。

本稿は、一つの事例ではあるが、帝国の国民が、帝国意識を自ら主体化するそのプロセスと、下支えする帝国意識の恐ろしさの一端について分析したものである。

注

- 1) [川村湊 1999]、[石剛 1999]、[木畑 1998=2000] 等がある。
- 2) [木畑 1987=1989 : 275-6]、[木畑編 1998=2000 : 5] を参照。
- 3) 歴史学の分野では様々な研究がなされているが、本稿では色川大吉の政治意識を取扱った研究を参照している。
- 4) [有泉 1968] は『相沢日記』の紀元節関連の記述をとりあげて豪農の位置にあった日記作者の政治意識の分析を行っている。
- 5) この期間の日記は、四百字詰原稿用紙に換算して 100 枚以上書かれており、この間の平均枚数は 239 枚である。なお日記はすべてが残っているわけではなく紛失しているものもある。
- 6) 軍旗祭等の催しが定期的にかかれ、当日は敷地内が開放され、催し物や多数の市民で賑わい、弘安たち家族も出かけて楽しむ様子が記述されたり、対外戦争や第九師団の朝鮮駐屯のための派遣の際にはその送り迎えに金沢駅まで出向いたり、新兵入営や出沢の際には見に行ったりと、日常生活が軍との関わりの中で営まれていた。そのような軍都金沢の様子が記述されている。例えば次の引用は新兵に関するものである。「・午前七時清二ト新兵入営ニ付甚右エ門坂下ニ至リ見ル。数多ノ旗ヲ立テ萬歳ノ声勇マシク入営ス。実ニ心地ヨシ。旭日ノ輝キ一入勇ヲ添ユ。山尾、白山、辰巳、安原ノ諸氏ニ逢フタ。」(1910M43.12.1)
- 7) 本稿では、先行研究で使用された「帝国意識」という概念を、そこで使用されている概念とほぼ同様のものとして使用する。本稿では、植民地朝鮮を初め帝国主義的な対外侵出を事例としているため、帝国意識というが語に加えて、他者認識・意識という語も帝国意識を指す概念として使用することとする。

- 8) 明治の瓦解後、旧前田藩御用職人としての地位を失った父清左衛門は、身分的、経済的な貧困を余儀なくされたが、授産のため始められた石川県勸業場(明治7)での象嵌銅器製造に参加するようになり、その後職人として開業する。そのときの沿革開業には「予カ白銀職ハ累代ノ業務ニシテ数代金沢旧藩前田家ノ御用ヲ蒙リ武器方等緒細工被申付、私ニ至リ六代連綿トシテ御用相勤メタル」と記されている。[田中1974:14,19]
- 9) 4月の講和時には祝意を表して午後の授業が休みになり、5月には市内各学校合同の日清講和祝賀運動会が行われ、その後3日間の休校。7月、金沢からの出征軍隊の凱旋時には3日間の歓迎行事と休校といった形で祝意が経験されている[金沢市史編さん委員会2006:239]。
- 10) 第一学年修了の「講習証明書(明治38年5月15日付)が残っている[田中1974:41]。
- 11) 日記はその大半が金沢市教育委員会によって、2000-2003年に4分冊が刊行されている。
- 12) 旅順攻防や奉天付近の大激戦に第九師団が投入され、戦闘能力を失うほどの戦死者を出した[金沢市史編さん委員会2006:155-6]。
- 13) 母の弟に当たる叔父で、「韓国併合」後の1911(明治44)年2月、それまでいた北海道での仕事を止め、朝鮮に渡っている。仕事は警察関係(弘安の娘である米澤信子さんによる)で、母の実家である藤掛家の戸主である。日記では職業に関しては、「藤掛喜作様へ看守長昇進の祝辞の手紙を書き送る」(1920T9.12.13)という朝鮮独立運動後の記述や、「…看守長の服や剣がピカピカする」(1921T10.10.24)といった帰沢したときの記述がある。
- 14) 韓国統監府開庁は、1906(明治39)年3月で、当時、すでに日記を書き始めていた。なお初代統監は伊藤博文である。
- 15) 地元の地方紙北国新聞と報知新聞を購読していた。新聞を読んだ後は近隣に回覧していた。『報知新聞』は、1872(明治5)年創刊の『郵便報知新聞』が1895(明治28年)年に改題されたもので、明治末期から大正期を通じて東京で第一位の部数を誇っていた[佐藤2002:289]。
- 16) 併合後、最初に渡鮮したのは同窓生横地雅一である。1910(明治43)年12月、弘安の日記に併合の事実が記されるより早く、「朝鮮龍山ノ郵便局へ任務スル筈ニテ、出發スヲ見送ニ行キシガ…」(1910M43.12.12)と記されている。続いて叔父嘉作が1911(明治44)年2月に渡鮮。同年代の母方の親戚高桑宗一が嘉作を頼って1912(明治45)年1月に渡鮮しており、彼は1916(大正5)年には騎兵で朝鮮へ行っている。同級生の能口君は、1914(大正3)年、騎兵上等兵で朝鮮へ行っている。
- 17) 東京へは弘安の周りでも知人や遠縁の親戚、親友の同級生など最も多く移住、遊学している。弘安自身も結婚前、東京への夢を抱いていた。
- 18) 4-3に後述。
- 19) 北国新聞1914(大正3)年11月8日。
- 20) 北国新聞1914(大正3)年11月8日、同9日。
- 21) 北国新聞1914(大正3)年11月9日。
- 22) 福助座の券を姉からもらったためである。「・夕、長田つき姉カ来られた 今晚福助座にて結核豫防會の演藝あり、其入場券を貰ったから皆々行かないかと…」(1914T3.11.9)
- 23) 日記記述(1914T3.11.10)。
- 24) 日記記述(1914T3.11.12)。
- 25) 「提灯は中小へ問ふ合せし處、幸ニありて百五十注文せり 後より小幡ニ造りし旗行燈五十及外二十個の提灯も用せり…」(1914T3.11.13)

- 26) 日記記述 (1914T3.11.13)。
- 27) 日記記述 (1914T3.11.13)。□は原文における不明箇所である。
- 28) 韓国併合時のありようと類似している。本稿 4-1 を参照。
- 29) 最終的な朝鮮独立運動の検挙者数は 46,948 人、死者 7,509 人、負傷者 15,961 人にのぼる [朴殷植 1972=1993 : 183]。
- 30) [大正ニュース事典編纂委員会 1987 : 133]
- 31) 日記記述 (1923T12.9.4)。
- 32) 植民地朝鮮に対しては、前述の独立運動 (1919)、間島虐殺 (1920)、1920 年代の朝鮮共産党をはじめ労農、学生運動の弾圧による虐殺等、多数の虐殺事件を起こしているが、関東大震災時の 6 千余名は最大であった [朴慶植 1965=2005 : 38-42]。
- 33) 日記記述 (1923T12.9.4)。
- 34) 朝鮮を「鮮」と表現するのは、1910 (明治 43) 年の韓国併合以来で、政策的に創出・流布・受容されてきたもので、朝鮮人に対する日本人の蔑視・賤視が込められており、日本の植民地支配の歴史性と深くつながる差別表現である。[大正ニュース事典編纂委員会 1987 : 439-440]
- 35) 新聞の他に媒体として弘安にとって重要であったものに、当時盛んに行われていた各種の演説会、講演会や各種の雑誌の講読や図書館の利用などがあるが、本稿では言及できなかった。
- 36) 注 1) を参照。
- 37) 色川は、「絶望の明治村」において、最底辺の農民を自殺的な餓死にまで追い込んでいったものを、自村＝共同体の暗黙の強制と重なりあった個別意識に存する内縛の論理として明らかにし、底辺の民衆が天皇制を下から支える恐ろしさについて論じている [色川 1970=1975 : 236]。これはまさに抵抗しない民衆が下支えする恐ろしさを議論した例である。しかし、そこでは、自村では餓死を選ぶという内側から規制された主体のありようが明らかにされたのであって、その主体がいかに主体化していったのかというメカニズムではなかった。

文献

- 有泉貞夫 1968 「明治国家と祝祭日」『歴史学研究』11 月号 第 341 号 61-88
色川大吉 1968 「天皇制イデオロギーと民衆意識」『歴史学研究』341 号 2-20
色川大吉 1970=1975 『明治の文化』岩波書店
色川大吉 1973=1976 『新編 明治精神史』中央公論社
色川大吉 1995 『色川大吉著作集 2 近代の思想』筑摩書房
石剛 1999 「日本語・植民地・帝国意識」『帝国意識の解剖学』世界思想社 195-226
板垣竜太 2004 「植民地の憂鬱 — 農村青年の見出された世界」『植民地近代の視座 朝鮮と日本』岩波書店 143-163
梶村秀樹 1992 『梶村秀樹著作集 第 1 巻 朝鮮史と日本人』明石書店
梶村秀樹 1993 『梶村秀樹著作集 第 2 巻 朝鮮史の方法』明石書店
金沢市史編さん審議委員会 1969 『金沢市史 (現代編)』上 金沢市
金沢市史編さん審議委員会 1969 『金沢市史 (現代編)』下 金沢市
金沢市史編さん委員会 1999 『金沢市史 資料編 11 近代 1』金沢市
金沢市史編さん委員会 2006 『金沢市史 通史編 3 近代』金沢市

- 川村湊 1999 「近代日本における帝国意識」『帝国意識の解剖学』世界思想社 167-194
- 木畑洋一 1987=1989 『支配の代償 英帝国の崩壊と「帝国意識」』東京大学出版会
- 木畑洋一編 1998=2000 『大英帝国と帝国意識 - 支配の深層を探る』ミネルヴァ書房 1-25
- MacKenzie, John M. 1984 *PROPAGANDA AND EMPIRE* Manchester University Press
- 正木恒夫 1995 『植民地幻想』みすず書房
- 明治ニュース事典編纂委員会 1986 『明治ニュース事典明治 41-45 年』第 8 巻 毎日コミュニケーションズ
- 朴殷植 姜徳相訳 1972=1993 『朝鮮独立運動の血史 1』平凡社
- 朴殷植 姜徳相訳 1972=1990 『朝鮮独立運動の血史 2』平凡社
- 朴慶植 1965=2005 『朝鮮人強制連行の記録』未来社
- 佐藤卓巳 2002 『「キング」の時代 - 国民大衆雑誌の公共性』岩波書店
- 佐藤卓巳 2004=2005 『言論統制』中央公論社 中公新書 1759
- 大正ニュース事典編纂委員会 1987 『大正ニュース事典大正 8-9 年』第 4 巻 毎日コミュニケーションズ
- 田中善男 1974 『加賀象嵌職人 - 米沢弘安の人と作品』北国出版社
- 鶴見俊輔代表 1962 『日本の百年 5 震災にゆらぐ』筑摩書房
- 鶴見俊輔代表 1962 『日本の百年 6 成金天下』筑摩書房
- 鶴見俊輔代表 1962 『日本の百年 7 明治の栄光』筑摩書房
- 米澤日記編纂委員会 2001 『米澤日記 上巻』金沢市教育委員会
- 米澤日記編纂委員会 2002 『米澤日記 中巻』金沢市教育委員会
- 米澤日記編纂委員会 2000 『米澤日記 下巻』金沢市教育委員会
- 米澤日記編纂委員会 2003 『米澤日記 別巻』金沢市教育委員会
- 尹海東 2002 「植民地認識の『グレーズーン』」『現代思想』vol.30-6 132-147